

博士論文要旨

ブルデューの〈界〉の方法論と対応分析：

現代日本のポピュラー音楽の構造分析を事例にして

立命館大学大学院社会学研究科
応用社会学専攻博士課程後期課程

ヒライシ タカシ

平石 貴士

本論文は二部構成になっている。第一部では、フランスの社会学者ピエール・ブルデュー(1930-2002)の〈界〉理論を取り扱い、特に(多重)対応分析と彼の社会理論とのあいだの関係性に着目しながら、実際的な調査の方法としてその理論を解明する。第二部では、〈界〉の方法論と多重対応分析を用いて、現代日本のポピュラー音楽の〈界〉を分析する。

〈界〉は、ブルデューが1960年代に発案し、その後の研究生生活を通して発展させ続けた彼の中心概念のひとつである。ブルデューにとって、近現代社会は様々に機能分化し、相対的に自律した諸領域(例えば、経済、政治、宗教、文化)である〈界〉同士の関係性の構造によって構築されているものだった。先行研究は〈界〉概念を理論的に扱い、経験的な方法論として取り扱ってこなかった。〈界〉や社会空間を経験的に分析するために、ブルデューは対応分析という統計技術を1976年にはじめて用い、彼の最後の研究までそれを使用し続けた。この技術は1960年代にフランスの統計学者ベンゼクリによって開発され、彼の弟子たちであるフランスの幾何学的データ分析学派とブルデューは、オルタナティブな社会統計思想を確立し、回帰分析などの支配的なアメリカの標準的多変量解析に挑戦していた。この統計手法こそブルデューの社会調査方法論を議論する際には中心的な課題を成していた。ブルデューは、様々な〈界〉を共通に調査する方法を含んだ〈界〉の一般理論が確立可能であると考えていた。この方法を理解し、特定の〈界〉の研究に応用するためには、ブルデューの方法の詳細にまで、〈界〉の構成員の標本を作成する方法や構成員が保有する変数に対する調査項目の決定方法に至るまで検討しなければならなかった。先行研究はこの面に焦点を当ててこなかった。

ポピュラー音楽研究では、支配的な学派であるカルチュラル・スタディーズ(CS)がブルデュー理論の一部の概念を受容していたものの、彼の〈界〉理論の経験的な側面、特にデータ分析については無視してきた。概念とデータとの関係性を明確にしようとするブルデューの努力は、文化社会学の他の諸潮流と比較しても類例をみない。〈界〉理論とその経験的調査法

は、文化研究における帰納的プロセスの厳密さを促進するものとして期待できうる。

本論文第一部の第一章では、ブルデューの3つの主要概念、〈ハビトゥス〉、〈資本〉、〈界〉について議論を行った。これらの概念はブルデューの経験的調査法の諸規定のなかで相互依存関係にある。したがって〈界〉を研究することは、〈界〉に現れる諸個人の〈ハビトゥス〉と〈資本〉を調査するということに帰着する。

第二章では、なぜブルデューは対応分析を使用したのか、彼はどのように〈界〉のデータ収集と分析を行ったのかを検討した。その結果、対応分析という統計的アプローチと構造的因果性という概念に基づく彼の社会思想とのあいだの親和性がその理由であることがわかった。次に、ブルデューが〈界〉の標本を作成する際には、〈界〉のなかで諸個人が保有する〈界〉(ないし権力)の保有量の大きさを標本抽出の基準にしていることが明らかになった。

第三章では、〈界〉理論の「反省的」側面を検討した。文化領域についての厳密な調査・分析を行うためには、研究に用いる道具、方法、概念、対象の分類方法、調査設計、つまり研究者自身の視点を常に「反省」しなければならない。この自己分析において、〈界〉理論を研究者自身に対しても使用することができる。〈界〉理論は、文化研究や文化社会学のなかのひとつの視点であるが、ライールがブルデューを批判する際に引用する相互行為論などの他の理論的立場との関係において比較されうる。この比較は、〈界〉理論が観察のレベルにおいて特徴を持つことを明らかにする。すなわち、〈界〉の生成史、時期 A と時期 B のあいだの構造史、またのその期間の不変の構造といった観察レベルの特徴である。

第二部の始まりである第四章では、ポピュラー音楽の〈界〉の調査における分析視点を規定するために、ポピュラー音楽に対する理論的な視点の空間を検討しなければならなかった。ひとつは、CS によるポピュラー音楽の支配的な定義であり、「人々の抵抗」という表現で表される政治的に理想化された観点である。もうひとつは、音楽美学の形式主義による定義であり、これはジェンダーや年齢といった、形式主義以前にあるポピュラー音楽の諸側面を分析から除外している。このふたつの理想化された観点は学者の〈界〉におけるアカデミック資本の追求戦略として分析される。しかしながらポピュラー音楽の〈界〉は、メディア資本と商業資本によって構造化されている。これらの議論を通してポピュラー音楽資本とは何かを検討した。

第五章では、多重対応分析を用いて、現代日本のポピュラー音楽アーティストの〈界〉の構造分析を行った。オリコンのデータに基づき、2014年の週50位のアーティスト1,304を標本抽出し、性別、デビュー世代、グループ規模、iTMSに登録された音楽ジャンル、売上枚数、音楽テレビ番組『Music Station』出演回数、音楽雑誌『ロッキング・オン・ジャパン』掲載回数といった変数を用いて、多重対応分析を行った。分析の結果、第一軸は性差、第二軸は世代、第三軸は売上枚数という順序でアーティスト間の差異が構造化されていること

がわかった。これは音楽ジャンルが性別と世代によって強く規定されていることを示した。男性アーティストたちはヒップホップ、ロックといった第二次大戦後における英米の男性若者下位文化と、女性アーティストたちはJ-Pop、アニメ・ソングといった戦後の日本の若者下位文化と親和性を持ち、これは性役割分業の一般的な社会・文化構造と対応し、ポピュラー音楽における象徴的意味を形成している。これらの研究によって、データ分析は、形式主義の音楽美学では扱うことのできない側面、つまりアーティストたちの性別と年齢の分布構造が音楽の象徴的意味の形成に対して強い影響力を持っているという事実を明らかにできることを示した。